

## 審査結果の要旨

氏名 カルパナ ポウデル タンダカラ

本研究は、ネパール・カトマンズの若年学生の歩行者交通外傷に関連する行動危険因子と受傷機転に関して調査したものであり、若年学生の路上での危険行動と歩行者の交通外傷経験の関連を調査した途上国のみならず先進国を含めても最初の研究である。これらの関連を調査することは、以下の二つの理由により非常に重要である。

理由1．路上でのより安全な行動を判断することが、特に道路が整備されていない地域においては、困難であるためである。したがって、そのような国では路上でより安全な行動をとることによって必ずしも歩行者の外傷を予防することになるとはかぎらない可能性がある。

理由2．過去の先進国における安全行動介入研究は、危険行動が歩行者の外傷の危険因子であるという仮定にもとづいて行われてきた。そのような介入研究により、行動変容が確認されたが、路上での行動と歩行者の外傷については、これまで調査されてこなかったためである。

本研究の主な結果は以下の通りである。

結果1．道路横断前に信号が青に変わるのを待たない若年学生は、常に信号が青に変わるのを待つ学生と比較して、より交通外傷を経験する傾向があった。

結果2．若年学生の路上での行動、すなわち道路横断前に左右を確認しなかったり、路上や歩道で遊んだりといった行動と、歩行時の外傷経験の間には統計的に有意な関連は認められなかった。

結果3．若年学生においては、道路横断中や路上で遊んでいるときは自動車との衝突が多く、路上歩行中は自転車との衝突が多かった。

今後は、縦断研究、理想的には無作為割付対照研究を行い、路上でより安全な行動をとることによって歩行者の外傷を減少させることができるかどうかについての結論を導き出す必要がある。しかしながら、本研究の結果により、道路整備の不十分な途上国において、行動アプローチは信号機の導入や車道と歩道の区別といったような環境の改善なくしては、必ずしも歩行者の外傷を予防するとはかぎらないことが示唆された。これは途上国における交通外傷予防のための介入策をデザインする上で重要な資料となるものであるため、学位の授与に値するものと考えられる。